

柏屋の家名を用ひて商之、三ヶ津名古屋に、須臾の間に、其名を發し、一之橋瀧尾社を結構に造立し、彦右衛門剃髮して正啓と號す、○下略

〔翁草〕河村瑞軒成立之事

河村瑞軒事、元は車力十右衛門とて、常に車を押して世を渡る傭夫なり、○中略

十右衛門事、浩る卑賤の業に暮すと雖、生得其心廣く、才智拔群の者成しが、或時不圖思ひ付、上方に行て身の安否を究んと、僅の諸道具を賣て、金二三歩肌に著け、小田原迄來て一宿せしに、相宿に老翁あり、何角と語り合ふに、十右衛門が上方江登る所以を問、十右衛門爾々と答ふ、翁笑ふて、今繁昌の江戸を捨、上方へ行、何の立身か有ん、情御邊の人相を見るに、大きに家を起すべき相有り、不如江戸にて勵まれんにはと云、十右衛門つくづく此の翁を見るに、唯者ならぬ氣性顯れければ、忽ち得心して、實も翁の異見尤也、然らば江戸にて一と勵致して見と、翁に別れて、江府へ引返、品川を通けるに、折節七月盆過にて、瓜茄子夥敷磯端に流寄しを、不圖心付て、其の邊の乞食共に錢を取らせて取上げさせ、所縁の所にて古桶を借り、右の瓜茄子を鹽漬にして、引かづき毎日普譜小屋江行、是を賣る、大勢の日傭ども晝食の菜に吾もくと競調ふるに、仍夫が段々瓜茄子の漬物を鹽梅よく仕込みて賣けるに、元來發明者なれば、早速御普請の役人へ取入、役人甚十右衛門を賞美して、汝左様の渡世を致さんよりは、日傭頭をして出精せば立身すべしと勸るに、渡りに舟と速かに畏請て、夫が御普請場の幟を預り、大勢の日用共を引廻し、萬の駈引他の及ぶ處にあらず、依之役人より褒美を囉ひ、餘程金を儲て、夫が下町の表店を借り、家普請を奇麗に致、手代を差置き、大屋并近邊の者共を振舞、萬づ寛濶成體なれば、近所にても宜敷商人の様に取沙汰しけれ共、實は餘慶なき身上故に、普請振舞等に費エて、元手銀も無く成しか共、少しも其の色目を見せず、然るに開運の時來るにや、夫より間もなく江戸大火にて、自分の居宅も焼けれ共、少し